

◎日本国特許庁(JP) ◎特許出願公開
◎公開特許公報(A) 昭61-13944

◎Int.Cl.¹
A 61 B 8/00

識別記号 庁内整理番号
6530-4C

◎公開 昭和61年(1986)1月22日

審査請求 未請求 発明の数 1 (全6頁)

◎発明の名称 超音波診断装置用探触子のアダプタ構造

◎特 願 昭60-41228
◎出 願 昭59(1984)6月28日
前実用新案出願日援用

◎発明者 谷島 勲次 東京都大田区上池台1丁目30番13号
◎出願人 株式会社 ヤジマ 東京都大田区上池台1丁目30番13号
◎代理人 弁理士 富田 幸春

明 標 面

1. 発明の名称

超音波診断装置用探触子のアダプタ構造

2. 特許請求の範囲

(1) 超音波診断装置の装置本体にリードケーブルを介して接続されている探触子に対する着脱自在な骨部診断用スパーサ型探触子のアダプタ構造において、ケース下部に形成された超音波放射口から設定高さ部位に挿入探触子保持部が形成され、直して保持部と超音波放射口との間に超音波透過程収納部が形成されていることを特徴とする超音波診断装置用探触子のアダプタ構造。

(2) 上記挿入探触子保持部がケース内裏面の段差部であることを特徴とする上記特許請求の範囲第1項記載の超音波診断装置用探触子のアダプタ構造。

(3) 該段差部が複数個で構成されていることを特徴とする上記特許請求の範囲第2項記載の超音波診断装置用のアダプタ構造。

(4) 上記収納部が上記ケースのフランジとその

上部裏面とから形成されていることを特徴とする上記特許請求の範囲第1項記載の超音波診断装置用探触子のアダプタ構造。

(5) 上記超音波透過程収納部が大返送導管を密封した後状態から成ることを特徴とする上記特許請求の範囲第1項記載の超音波診断装置用探触子のアダプタ構造。

3. 発明の詳細な説明

〈産業上の利用分野〉

開示技術は、病院等の医療機関での患者等の体内に対する超音波診断技術分野に属する。

而して、この発明は、3.5MHzや7.5MHz等の超音波で患者の体内の所定疾患部位を超音波電子変換器を介してブラウン管上に視認可能に表示し、更に、カメラで静止像を撮ることが出来る超音波診断装置に対してリードケーブルを介して接続された超音波發信とエコー受信を行う探触子に対して外装接着部固定し、骨部診断検査が自在に行われ得るようにし、又、該探触子から離脱して一般の筋肉骨骼部位の診断も可能であるように

したスパーサ型の探触子のアダプタ構造に関する発明であり、特に、該アダプタ本体をなすケースを皮膚に接する部位に超音波放散口が形成され、又、該超音波放散口から探触子の超音波放散部に対応する所定高さに該探触子に対する固定用の停止部が形成され、又、該停止部と上記超音波放散口との間に超音波の高透過率を有する透過程を密封収納した薄膜製の超音波遮断促進体を収納する部分が形成されている超音波診断用の探触子のアダプタ構造による発明である。

〈従来技術〉

周知の如く、近時国民保健衛生の向上の観点から健康維持監視、成長度測定等は勿論のこと、病気治療のための各種の医療機器装置が目覚ましく開発され実用化されている。

このうち、投薬や外科手術、又は、健診検査のための被検査データ収集に際して患者等の体内状態を視察し得る状態で捉えることは極めて重要であるが、例えば、レントゲン撮影等は放射能障害の懸念があるために、その使用頻度は限界がある不

具合がある。

これに対して、近時超音波診断装置が急速に開発されて使用者側には極めて簡易に、又、被検査側においてもほとんど実質的な影響がなく、又、心理的に安定した状態で診断検査検査を受けることが出来る等の優れた点から急速に広まる傾向にある。

而して、該超音波診断装置は、第4図に示す様に、該装置1は一般にローラ2等を装備して診断検査等を受けるベッド3に近接させ、該装置本体のフレームのスタンド4にセットされている第5図に示す様なリニア型の探触子5や、コンバックス型の探触子5'を用いて、図示しない被検査診断者の皮膚に沿って該探触子5(5')をその先端探触面にセリー等を施布して拂らせ、所定の超音波を放散し、そのエコーを受信して装置本体に設けられたフランク管6に超音波信号の電子信号変換を行ってディスプレイすると共に、必要に応じて該フランク管6に映像された被検査部の映像7をカメラ8により静止映像として撮影し、医師や

検査技師等が該フランク管6の被検査部7の状態を動的に捉え、当該検査部の状態を視察し、又、後のデータ収集のためカメラによりこれを記録しておくことが出来、場合によっては患者等も同時に該フランク管6上で自己の被検査部分の映像7を医師等の説明を受けながら確認することが出来るという優れた面がある。

ところで、かかる超音波診断装置1においては直接のデータ収集は探触子5(5')から得られるが、該探触子5、5'から放散される超音波は通常2~20cm程度の深さの被検査部分に対してエコー反射して板これを電子信号変換して上記フランク管6に映像化するようになっているために、例えば、指の骨部分、又は、肋骨等極めて皮膚から離れた部分の骨部分に対しても超音波診断が行えないという欠点があった。

蓋し、探触子5、5'から放散される超音波は該骨の部分が吸い立てるために、直ちに反射されて通過せず、したがって、骨内部エコーが検出出来ないがためである。

したがって、一般に肋間鏡等に対する検査診断に際しては、第5図に示す様なリニア型探触子5よりも、第6図に示す様なコンバックス探触子5'を用いて肋間内に拡散反射するエコー検出を介して行っていた。

〈発明が解決しようとする問題点〉

そのため、前述の如く実質的には優れた一面を待っているながらも、長年の探触子によっては装置本体がいかに計測機能に優れ、処理処理に秀でており、適確なモードの映像が得られるとしても、対象が内、臟器等の診断検査に限られて骨部に対する診断検査が出来ないという多面的検査機能に欠ける欠点があり、装置の万能性を求める要望は極めて強かった。

さりながら、これに対応すべく、特殊な装置を開発すれば、機器が極めて複雑になり、コスト高になる不利点があるうえに、その保守点検負担は極めて煩瑣となる難点もあった。

これは、医療機器の高性能化、高機能化に応える条件としては極めてマイナスであり、寧ろ、こ

の普及と促進を阻害する不都合さとなっていた。この発明の目的は上述従来技術に基づく本來的には優れた診断検査能力を有する超音波診断装置がその探触子の骨部診断機能を欠く問題点を解決すべき技術的課題とし、肋間筋診断を可能にし得ることは勿論のこと、骨部に対する診断検査能力もあるようにして、而も、簡易な構造でありながら合理的設計に基づいて何等困難なく使用することが出来、そのうえ、耐久性に優れ、医療費削減促進事業における検査診断機器技術利用分野に益する優れた超音波診断装置用深触子のアダプタ構造を提供せんとするものである。

〈問題点を解決するための手段・作用〉

上述目的に沿い先述特許請求の範囲を要旨とするこの発明の構成は、前述問題点を解決するために超音波診断装置を用いて肋間筋に対する診断検査を行うに際しては従来同様にリニア型やコンベックス型の所定の探触子を用いて在来難易同様に診断検査を行い、而して、骨部診断を行うに際しては予め用意しておいたアダプタのケース内部

に超音波透過率の大きさである透過率を密封した袋状構造の超音波透過促進体を挿入して超音波放射口に固定させ、又、上部に対して当該超音波透過促進装置にリードケーブルを介して接続してある所定の探触子を挿入して係止部に係合固定し、該アダプタの下部の超音波放射口の上記超音波透過促進体の下面にゼリー等を塗布して皮膚上面に押させ、所定の超音波を超音波放射口より放射すると、該探触子の下面と皮膚表面との間に該アダプタの所定範囲が上記透過率を介して介在することになり、したがって、該触子から放射される超音波は脊椎に骨部に反射してそのエコーが正確に検出されてブラウン管上に正常か、異常かの映像が表示され、医師や検査技師は当該ブラウン管上の映像を見ながら所定の処置を施し、必要に応じてカメラ撮影も行えるようにした技術的手段を構じたものである。

〈実施例一構成〉

次に、この発明の1実施例を第1~3図に基づいて説明すれば以下の通りである。尚、第4図以

下の図面と同一部品部分は同一符号を用いて説明するものとする。

1はこの発明の要旨を成すアダプタであり、外形が直方体状に形成され、そのケース9は、例えば、硬質プラスチック製であり、その下面には周囲に可及的に薄く形成された方形フランジ10が係止部とされて形成され、該フランジ10の内側には結果的に方形の超音波放射口11が形成されている。

又、その上部内面には該フランジ10からの高さにおいて探触子が、例えば、3.5MHzの場合は7mmに、或は、7.5MHzの場合は3mm等と2mmから約10mm程度の設計高さの範囲で係止部としての段差部12が探触子5(5')を挿入した時に確実にホールド8に係止されるように形成されて、その上側は骨内部13として上方に方形の探触子挿入手筒部14を形成しており、該骨内部13の内周面にはシリコンゴム等の弾性性のライニング15が張設されている。

尚、上記フランジ10と段差部12の間のhの高さをさまざまに変えて一つの超音波診断装置1に対

して設計範囲内でアダプタ8を複数種作って組み合せてパート部品として販売するようにしてもよい。

したがって、該hの高さの範囲での内部部分は超音波透過促進体収納部16として形成されていることになる。

17は超音波透過促進体であり、例えば、0.3mm以下の可及的な薄膜製の軟質プラスチック製の直方体型の袋18から成り、その内部には、例えば、水道水に塩化カルシウム等を溶解させた超音波に対する透過率の高い液体が充填されて密封されている。

そして、該超音波透過促進体17は、第3図に示す様に、上記アダプタ8の上部筒口部14から挿入されて上記hの高さの収納部16内に収納されてその後の周囲がフランジ10に接着して摂動することなく、確実に収納セットするようされている。

尚、この場合、使用姿勢において該超音波透過促進体17の袋部18の下面是、ケース9の超音波放射口11から露出するような形状になる可能性がある

が、アダプタ 8体が小さく、又、その厚みも薄く形成され、更に、超音波透過程体17の薄型性の袋18はそれなりの自己保形性を有しているために、それほどの取出状態ではなく、又、その下面にゼリー等を塗って皮膚に沿らせる押圧作用を受けるために取出することはなく、又、破損して高透過程19が漏出する虞もない。

而して、5は実施例としてのリニア型の探触子であり、リードケーブル20を介して前記超音波診断装置1の図示しない構造部に接続されており、その下面にはフラットな超音波放射部21が形成されて周知在来形状と同一であり、該超音波放射部21は上記超音波透過程体17の薄型部の袋上面に当接すると共に、その周囲面はアダプタ 8のケース9の上部内側部の袋差部12に係合して固定セットされ、又、該袋差部12の上側の袋内部13の内裏面に接設されたシリコンゴム15に弾痕されて容易には取り外れたり、或は、振動する等の虞は全くされないようにされている。

〈実施例一作用〉

の収納部16内に収納され、その下面周囲はケース9の下部フランジ部18に座着して、該収納部16の高さと同じ高さにセットされ、その上面は該ケース9の係止部としての袋差部12と同じレベルになる。

そこで、リードケーブル20を介して超音波診断装置1に接続されている探触子5をスタンド4から外して該アダプタ 8の上部筒口部14からその内側のシリコンゴム製のライニング15の弾力性に抗しながら押入すると、その下面周囲は係止部としての袋差部12に座着すると共に、先行してセットされた超音波透過程体17の袋18の上面にも座着する。

而して、この座着状態で探触子5はシリコンゴムのライニング15に挟止固定されて容易に抜け出することはなく、又、描れ動くことなく、アダプタ 8と一体化化されて探触子体とされ、又、収納部16に収納された超音波透過程体17も保持されて固定状態になる。

尚、前述の如く該超音波透過程体17の下面は

上述構成において、前記第4図に示す様に、非診断検査パッド3に超音波診断装置1を近接させて所定の超音波診断を行うに際して助間器、或は、胎児に対する所定の診断検査を行うに際しては周知の如く、従来様様にリニア型探触子5、或は、下部放射面にゼリー等を塗布したコンベックス型探触子を用いて皮膚の上から該探触子5(5')を消させて所定の診断検査を行い、放射された超音波の反射エコーの映像をブラウン管5'上に表示して、或は、カメラ8にその静止映像を撮影して診断検査に供するようとする。

而して、例えば、肋骨や四肢の骨折等に対する診断検査を行うに際しては、使用する探触子の種類に応じて所定に対応されて組み合せセットされて販賣されているバーツ部品としてのアダプタ 8を取り出し、その上面筒口部14から上記高透過程を有する袋19を収納した薄型袋18からなる超音波透過程体17をその上下面に従来使用されていたゼリーと同じ種類のゼリーを塗布した状態で挿入していくと、該超音波透過程体17はアダプタ 8

超音波放射部11から膨張する状態になろうとするが、アダプタ 8の幅が薄いことと前述の如く、袋18のそれなりの剛性があるためにさほど膨出せず、又、被検部位に押し当てるに際して滑らせる状態を取るために取出したり、高透過程の袋が漏出することもなく、そこで、肋骨や四肢の骨部に対する検査を行う。

而して、探触子5と一緒にアダプタ 8を超音波透過程体17の下面に塗布したゼリー等を介して消させていくと、探触子5から放射される超音波は該超音波透過程体17の収納部16の高さを介して放射されるために正確に当該骨部を検査範囲に捉えてそのエコーは探触子5を介し、ブラウン管8上に結像されて視認状態になり、医師や検査技師は当該結像を観察しながら所定の処置を講じ、又、必要に応じてカメラ8でその静止映像を所定に撮影する。

又、超音波診断装置1の種類によっては超音波の振動を切換選択することが出来るタイプのものがあるが、したがって、このような装置にバーツ

として装備させるアダプタ 8については、の高さが異なる複数種のものを組み合せ装置させても良いし、又、上述実施例のリニア型探触子 5の代わりにコンバックス型の探触子 5'を用いてこれに対するアダプタ 8を複数種揃えて組み合せバーツとしておくことも出来ることは勿論のことである。

尚、この発明の実施原様は上述実施例に限るものでないことは勿論であり、例えば、アダプタのケースの上部前部に適宜切換式のクランプ装置を設けておいて探触子挿入に際してこれを固定一体化するようにしたり、超音波診断装置の付属探触子に最初から超音波診断部を組み付けて一体化し、これを複数種の高さを有するものにしておいて切換操作によって使い分けるようにする等種々の原様が採用可能である。

尚、実際によれば、超音波診断装置自体に何等設計変更や別構造を付加することなく、この発明のアダプタを探触子に装着するだけで動物実験は勿論のこと、人体実験においても筋骨や四肢の骨部診断においてレントゲン撮影による診断検査と

実質的に何等変わることのない優れたデータを得ることが出来た。

〈発明の効果〉

以上、この発明によれば、超音波診断装置による屍體診断検査等の屍體検査が確実に行われ、而も、レントゲン撮影と異なって放射能の障害全く生じない優れた超音波診断において、これまで骨部診断が探触子からの反射超音波の反射によって行うことは出来ず、該超音波診断装置の機能を一元的なものにしか發揮させることの出来ない問題点を一挙に解決し、筋骨筋膜は勿論のこと、四肢の骨部診断も完全に可能であるようにしたことにより、現在に優れている超音波診断装置の間接診断検査機能をフルに発揮することが出来るようになったという優れた効果が得られる。

又、取り扱いは従来の超音波診断装置の探触子に対してその使用する振動に併せたアダプタをそのままに而して探触子に装着するだけで良いので、何等熟練が要らず、医師、検査技師、看護婦等が容易にこれを取り扱うことが出来るという効果も

挙げられ、而も、特に、保守点操作業等も要しないためにその耐久性は高く、使用中に故障等によつて使用が不能になることがない利点もある。

又、従来使用されている超音波診断装置にも簡単に組み合せることが出来る利点があるうえに、新設計製造の超音波診断装置に対してはリードケーブルを介して接続されている探触子に予めアダプタを組み付けて一体化することが出来るという設計上の、或は、使用上の導入性に富むという優れた効果も挙げられる。

そして、そのサイズは使用する探触子に対し、相対的に 20mmから 10~20mm程度の高さのアダプタをつけるだけでよいので、その操作は特別に並品間は増加するだけでなく、又、ハンドリングもしやすいという利点がある。

而して、探触子に対してアダプタが一種のスペーサ型のアダプタとして作用するために、四肢の皮膚上における探触子に対するスペーサ面層がアダプタのゼリー等を介しての皮膚上の清り操作に対しても、確実に探触子の皮膚に対する簡易取扱

が狂わせずにセットされて超音波を放射することが出来るために、プラウン管やカメラに対する結果位置が乱れるという虞もない優れた効果が挙げられる。

又、アダプタ内に於いて、その下部の超音波放射口から挿入探触子の間に 0.3mm以下等の後を介して高透過率の波を吸収するアダプタを介設しておこことにより、探触子の超音波放射部から放射された超音波は確実に骨部に達してその反射エコーはプラウン管上に確実に記録されるという優れた効果も挙げられる。

又、基本的にはアダプタの上部において探触子に対する係止部が形成されていることにより簡単に挿入される探触子は所定高さに探触子することが出来、その調整等が必要でないという良さもある。

4. 図面の簡単な説明

第 1~3 図はこの発明の 1 実施例の説明図であり、第 1 図はアダプタの裏面側面図、第 2 図は同裏面正面図、第 3 図はアダプタに対する超音波透

超音波休探触子の組入セット部分切替断面図、第5、6図
1は超音波診断装置の正面概略図、第7図は探触子の正面図、
第8図は超音波放射口、第9図は超音波透過促進体、
第10図はフランジ、第11図は透過程、
第12図は接着剤である。

1…超音波診断… 20…リードケーブル、

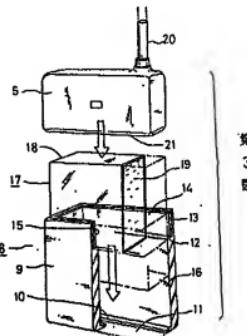
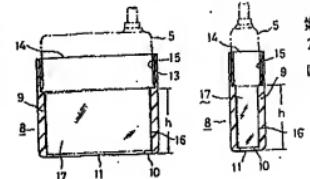
5、5'…探触子、 9…ケース、

11…超音波放射口、 12…係止部、

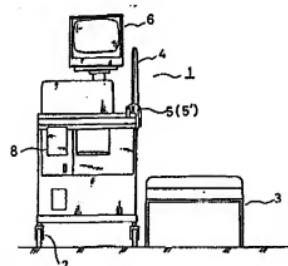
17…超音波透過促進体、 18…接着剤、

10…フランジ、 19…透過程、

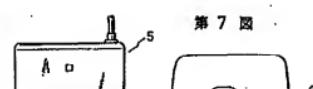
16…薄板



第4図



第5図



第6図

